



# 長崎まちのなりたち

## 開港によって発展した長崎の町「寛文の大火」に見舞われたあとの復興事業において新市街が造られ、町並みの原型ができあがった

### 長い岬の上に初めての町

長崎はその昔、「瓊<sup>たま</sup>ノ浦」や「深江浦」などと呼ばれ、長崎氏という豪族が支配していました。長崎氏は現在の桜馬場中学校の地に館を構えていたので、その一帯には小さな城下町が築かれ、そこから海に向かって長い岬がありました。この「長い岬」は「長んか岬」などと呼ばれ、それが「長崎」の地名になったともいわれています。

元亀元年(1570)の開港の翌年から、大村藩主大村純忠の命により、この長い岬の台地の上に「町建て」が行われ、6町(大村町、嶋原町、平戸町、横瀬浦町、外浦町、文知町)が形成されました。

### 内町・外町の誕生

天正8年(1580)、長崎は茂木・浦上とともにイエズス会に寄進されキリスト教の町として教会などが建ち並んでいました。しかし、天正15年(1587)豊臣秀吉が伴天連追放令を発し、長崎等の地を没収し、直轄地としました。このとき、秀吉は当時10町ほどに増えていた町の地租(土地税)を免除したので、これらの町は「内町」と呼ばれました(図1の白色部分)。文禄元年(1592)には23町となり、長崎奉行により支配されることになりました。1597(慶長2)年には、市街は中島川沿いに広がり、これ以降の町は「外町」と呼ばれ(図1の赤色部分)、長崎代官に支配されることになりました。



(図1)「寛永長崎港図」(長崎歴史文化博物館所蔵)

### 寛文の大火と都市計画

ところが、寛文3年(1663)、「寛文の大火」で総町66町のうち57町、家数2900戸を焼失してしまいます。幕府はこの長崎始まって以来の大火災の復興に着手。その際、道幅を本通り4間(8m)横町3間(6m)、溝幅を1尺5寸(45cm)に定めて新市街をつくりあげました。この事業は、寛文12年(1672)にほぼ一段落し、今日の起源と考えられる内町26町、外町54町の総町80町となり、幕末までつづきました。その後の新たな都市計画等で部分的な変更はあるものの、現在でも旧市街、特に寺町・中通り界限には、その町並みが残されています。

### 敷地割と町名の由来

長崎の町並みは、通りに名前が付けられ、両側に町家が並び、同じ通りの両側の地域がひとつの町を形成している「両側町」が特徴です。

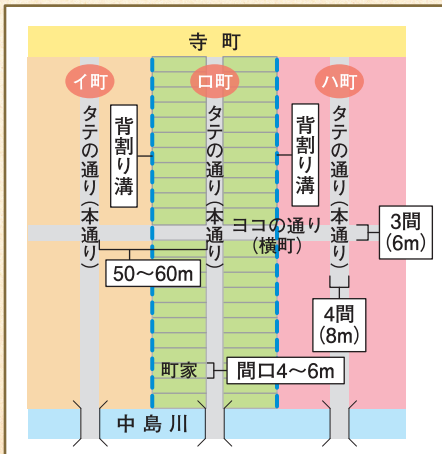
主な通りは中島川とほぼ直角に交わるタテの通り(本通り)と、それらをつなぐヨコの通り(横町)で構成されています。タテの通りの間は50～60mあり、これを背割りで2分し、タテの通りを挟んで向かい合った数十戸が一つの町を構成していました(図3)。町の名前は変わったものの、町割りは現在でも残っており、ししとき川沿いからは、今も東古川町と銀屋町の町境の背割り溝を見ることができます。

町名は大きく分けると、住民の出身地、町に多かった職業、地理的な位置、年代によって付けられ、内町は出身地に由来する名前が多かったようです。一方、外町は職業に由来する町名が多く、中島川沿いの染物や紙すきの職人町は、紺屋町、紙屋町などの町名がありました(写真1参照)。

その後の町名変更等で懐かしい町名が変わってしまったり、消えてしまったものもありますが、今も、通りや橋名などにその名残があるほか、銀屋町や東古川町など町名復活した町もあります。また、くんちの踊町など、コミュニティは現在にも受け継がれています。



編笠橋のたもとで紙すきをする風景。江戸時代はじめに中島川沿いに紙すき職人が多く住み着いたため「本紙屋町」という町名がついたといわれる(写真1:長崎大学附属図書館蔵)



(図3)町を構成する通りと敷地

### 長崎は他にはない町家の都市だった

幕末明治期の長崎は、町家の建物がびっしりと建ち並び、大正初期の「日本都市風景」(椋内吉胤:とちないよしたね著)に「長崎のように同じような古風な格子の家の集団が果てしなく続く風景は見たことがない…」という記述があるほど、その光景は珍しいものだったようです。長崎の一般的な町家は、格子や連子(れんじ)、裏の家へ続く小路(しゅうじ)などがある純和風木造住宅。間口が狭く奥に長いため、敷地の中に庭を作って光や風通しを良くしていました。昔のように連続した町家の並びこそないものの、長崎市には今も約300軒余りの町家が残っています。



町家が建ち並ぶ風景(明治中期以降)。諏訪町の通りを寺町(長照寺)方向に向かって撮影(写真2:長崎大学附属図書館蔵)

# 今も残る町のかたち ～寺町・中通り～

## 寺院、神社へと続く道が、商店街として発展

長崎の都市は内町から始まり、その外側に外町が造られ、周辺に寺社群が形成されてきました。内町は細長く周囲に石垣が築造され、諏訪神社下から西役所(現在の県庁跡地)にいたる道路は、公的なメインストリートとなりました。そこから伸びた外町の街路は、ほぼその骨格を現在に残し、中島川沿いに商家群、風頭山のふもとに寺社群が形成され、それをつなぐように橋が架けられました。

寛永2年(1625年)に、諏訪、森崎、住吉の三社が諏訪神社として合祀されたことから、諏訪神社へ参拝する為の道は商店街として発展していきました。眼鏡橋を興福寺の住職が造ったことからわかるように、中島川に架かる石橋は参拝客のために造られました。その門前町として形成され発展してきた現在の中通り商店街は、長崎で一番古い商店街です。



(図2) 享和元年(1801)の長崎図 (長崎歴史文化博物館所蔵)  
諏訪神社下から西役所にいたるメインストリートから外町に骨格が伸び、寺社群が縁どるように建つ。地図には旧町名と町の境界線が書かれている



現在の寺町・中島川周辺の地図に、左の享和元年の長崎図に書かれている旧町名をイラストにしてみました。赤字は現在の町名です。敷地割りはほぼ当時のまま。町名の中には今も残っているものもあります。